映画 *Enchanted*（『魔法にかけられて』）における字幕翻訳の分析と考察

佐々木　りか

1　はじめに

本稿では、翻訳とは何かを明らかにするための予備的研究として、映画字幕に対象を限定し、量的及び質的観点からその翻訳を分析し考察していく。今回は、映画 *Enchanted*（『魔法にかけられて』）を取り上げ、字幕翻訳の特徴を探る。

ところで、一般に翻訳というと、元の言語と翻訳された言語は、一対一の対応が想定されるのであるが、実際は両言語の違いによって必ずしもそうなってはいないのではないかと考えられる。例えば、英語から日本語への翻訳の場合、それらの対応の違いを見ることは、英語と日本語それぞれの言語構造などの違いを見ることになるのではないか。本稿は、映画における字幕翻訳を分析対象としているが、字幕というのは、１秒間に３～４文字画面に表示されるのが一般的で、画面上は横書きで最大１行に13～14文字を２行まで表示できるとされている。さらに、普通は役者の声が出ている（口が動いている）時間だけ表示される[1]。よって、元の英語を全て訳してしまうと、字幕をその時間内に表示し切れなかったり、画面上で字幕のスペースに収められなかったりすることから、元の言語と翻訳された言語が一対一で対応していることが、一般の翻訳よりも少ないのではないかと考えられる。そのような意味で、映画字幕というのは、一般の翻訳において対応の違いを生み出す言語の違いだけではなく、更なる制約を持っているといえる。本稿では、そのような制約に焦点を当てて字幕翻訳を分析し考察していくことにする。

2　分析方法

映画における英語のセリフが翻訳されると、日本語字幕だけではなく、吹き替えの日本語にもなる。本稿では、特に日本語の字幕翻訳がどのようになっているかを分析し、その特徴をより明らかにするために、英語のセリフと日本語字幕の比較だけではなく、翻訳されたという意味においては共通している、日本語吹き替えとも比較を行う。また、それらの比較においては、英語のセリフ・日本語吹き替え・日本語字幕それぞれの特徴をよく見るために、それら三者間の差異に注目する。分析の視点として、

量的観点と質的観点の２つがある。このうち量的観点とは、英語を全て訳したときの日本語の文字数と比べて、字幕の文字数が量的にどのようになっているかを捉え、字数制約の影響を見る。質的観点とは、元の英語のセリフと比べて、字幕の表現が質的に変わっていないかを捉え、作品の内容が伝わっているかを見る。また、分析対象とする英語のセリフは、より正確なデータを得るために、英語字幕を使う。そして、吹き替えは、日本語の音声を聞き取って文字に起こしたものを使い、字幕は日本語字幕を用いる[2)]。

3 分析と考察

この章では、今回取り上げる映画における字幕翻訳の特徴を明らかにするために、いくつかの場面を取り上げて、英語のセリフ・日本語吹き替え・日本語字幕を並べて見ていく。2で述べたように、以下においてはまず、量的観点から字幕の文字数がどのようになっているかに注目し、次に、質的観点から作品の内容が伝わっているかに注目する。

3.1 量的観点

ここではまず、字幕が持つ時間と文字数の制約によって、字幕の文字数がどのようになっているかを見ていく。その際、元の英語のセリフを全て訳したときの日本語を想定し、字幕の文字数が減っているか増えているかに注目する。なお、本稿では、英語のセリフを全て訳したときの日本語と比べて、字幕の文字数が減っていることを、「字幕の文字数が減っている」と表現することにする。同様に、英語のセリフを全て訳したときの日本語と比べて、字幕の文字数が増えていることを、「字幕の文字数が増えている」と表現することにする。

3.1.1 字幕の文字数が減っているとき

ここでは、字幕の文字数が減っている場面を見る。先に見た字幕の制約の理由としては、なるべく視線を役者に向けるためや画面の広さを確保するためなどもあるが、ほとんどが映画を観る人の負担を軽減させるためだといえる。セリフを耳で聞くよりも、文字で読む方が、時間がかかるので、字幕はより文字数が少ないことが普通であ

る。よってまず始めに、字幕翻訳のうち、映画全体を通して最もよく出てくる文字数を減らす手法を確認する。

3.1.1.1 字幕の文字数が減っているときの特徴

ここでは、映画を通してよく見られる、字幕の文字数が減っているときの特徴を、４つの場面を通して探る。

なお、本稿においては、例文の提示方法について、英語のセリフには①、日本語の吹き替えには②、日本語の字幕には③を付けることにする。取り上げる場面のセリフが１文のときは、１つの枠に①～③を並べ、２文以上セリフが連続した場面を取り上げるときは、①～③のそれぞれを１枠で囲み、１つの場面につき合計３枠で提示することを基本とする。セリフについた通し番号は、三者間において同じセリフを比較しやすくするためにある。その通し番号と①などの番号の横には、セリフを述べた人物などの名前を示す。また、考察の際に言及する箇所には下線を引く。

それでは、字幕の文字数が減っているときの特徴を探るために、次の場面から見ていこう。

1.① Giselle: Am I late? ／ ②遅れまして？ ／ ③遅刻？
2.① Animals: Hey, honey, wait up! We ain't done with you yet.
／ ②ちょっと待ってよ まだドレスが出来上がってなーい！
／ ③待って ドレスの仕上げが！

上記のジゼルと動物たちの会話では、字幕が「遅刻」や「仕上げ」という漢字の名詞になっている。「遅刻」は名詞のみの表示なので、漢字と同じくらい「？」という記号も重要な役割を果たしている。また、「ドレスの仕上げが」は文として不完全だが、それ以降の内容は観ている人が推測できるので省略されている。表意文字である漢字の伝達性と、文脈から理解する日本語の特性をよく表している。

次の場面も、字幕では漢字に変わっている箇所がある。

3.① Queen: To a place where there are no "happily ever after".
3.② 女王: "いつまでも幸せに" なんてものがどこにもない世界に行ったのよ。
3.③ 女王: "永遠の幸せ" なんて存在しない所さ

上記の字幕でも、「永遠の幸せ」や「存在」というように漢字を用いている。ちなみ

に‘happily ever after’が名詞のようになっているので、この映画での特別な扱いが伺える。

では次の場面を見てみよう。

4.① Robert: She's gonna live with us. ／ ②もちろん僕らの家さ。／ ③我が家で

上記の場面では、吹き替えの「僕らの家」が、字幕では「我が家」という漢字で更に短縮されている。また、文構造が重要である英語に対して、日本語は助詞によってその語の文中での働きがわかる。主語がなくても文が成り立つので、文脈でわかることは（特に人称代名詞）省略されることが多い。

次の場面は、また他の方法で字幕に漢字を用いている場面である。

5.① Giselle: Oh, that would be fun! ／ ②まぁとても楽しそう。 ／ ③楽しそう
6.① Robert: That would not be fun. ／ ②いやぁ楽しくないよ ／ ③退屈だ

上記の場面では、吹き替えが「楽しくない」というのに対し、字幕では「退屈」となっている。日本語は否定語が後ろに来るので、途中では否定かどうかが判断できない。ゆえに字幕では、「～ない」のような表現によって、途中までの予想が最後に覆され、解釈をし直すことは、文字を読むわずかな一瞬においては周り道に感じられるだろう。ここでの「退屈」は、漢字の伝達性と合わせてこのことを一気に解決しているといえる。

3.1.1.2 省略されるやりとり

ここまで、字幕の文字数が減っている場面を見てきたが、次の例は、英語のセリフのスピードが速い会話である。

7.① Sam: She has no driver's license. No passport.
Can't find this place she comes from.
8.① Robert: What place?
9.① Sam: Andalusia.
10.① Robert: Andalasia.
11.① Sam: Whatever, I've called travel agent.
I don't know if it's a country or a city.
12.① Robert: It can't be a state.

7.② サム：あの子免許証も持ってないしパスポートもないし
出身地も知らない場所だし。
8.② ロバート：えと　何だっけ？
9.② サム：アンダルーシア
10.② ロバート：アンダレーシア
11.② サム：どっちでもいいです。旅行会社や航空会社に電話したけど
国なのか街なのか。
12.② ロバート：州なわけないしなあ。

7.③ サム：免許証もないし出身地も知らない地名よ
8.③ ロバート：(字幕なし)
9.③ サム：アンダレーシア
10.③ ロバート：(字幕なし)
11.③ サム：国なのか街なのか調べたけど分からないの
12.③ ロバート：州か？

上記の場面で挙げた英語の会話は、約12秒間で行われている。会話のスピードが速いため、英語のセリフを全て訳すと字幕を読むことが追い付かない。よって、字幕では、サムが「アンダレーシア」を「アンダルーシア」だと勘違いしていて、ロバートがそれを正すやりとりが省略されている。結果的に、'Andalusia' と聞こえる時に「アンダレーシア」と表示されている。このように、ストーリーにあまり影響がないことは省略され、会話の主旨やセリフが最も伝えたい意味を重視する傾向がわかる。このように、字幕では文字数を減らすだけではなく、大幅な省略も起こり得るということがいえる。

3.1.2 字幕の文字数が増えているとき

ここまで、字幕の文字数が減っている場面を見てきたが、次に、映像付きという映画である故にあえて字数が増える単語を採用している例を見ていく。

次の例は、英語にも吹き替えにも無い「ハト」が字幕に表示されている場面である。

13.① Giselle: You have lovely friends.
13.② ジゼル：かわいいお友達がいっぱいね。
13.③ ジゼル：ハトのお友達ね

これはハトも話者も映っていない時、つまり画面の外で聞こえるセリフで、言い終わった直後にハトと話者が映る。先に「ハト」と表示されることによって、次にその「ハト」が映ったときにそれらが「お友達」だとわかると予想される。よって、英語には無かった「ハト」の字幕が、そのような理解の補助をしているといえる。ここでは、自然な形で受動的に入ってくる英語のセリフ・吹き替えとは異なり、自分で能動的に文字を読む字幕では、観る人の理解の仕方により気を遣わなければならないことがわかる。

次の例は、英語のセリフにおける‘this’が、字幕では「ドングリ」に変わっている場面である。

14.① Animals: Giselle, Giselle, how about this for your statue?
14.② 動物たち：ジゼル　ジゼル　王子様のお人形にこれはどう？
14.③ 動物たち：ジゼル　ドングリはどう？

上記の場面は、よく映像を見ないとドングリだとわからなので、ここでも字幕は理解の補助の役割を果たしていると考えられる。また、字幕では「これ」のような代名詞は好まれないことも見受けられる。

次の例は、英語のセリフには無かった「リンゴ」が字幕にはある場面である。

15.① Queen: The magic will not work unless you take a bite
before the clock strikes 12.
15.② 女王：時計が１２時を打つ前にこれをひと口でも食べないと魔法の力は
消えちまうだ。
15.③ 女王：魔法が効かなくなるよ　時計が１２時を打つ前にリンゴを食べないと

上記の場面の英語のセリフには‘apple’があるわけではない。ここでは、リンゴははっきり見え、話題の中心であり、かつセリフもリンゴとの関連が強い内容である。よって、この字幕は、理解の補強という役割を果たしていると考えられる。このこと

で、それがストーリーにとって重要な物だとわかる。

次の例は、英語の‘chipmunk friend and all’が、字幕では「リスとオオカミ」になっている場面である。

16.① Robert: Look, Giselle. That was a nice story about your chipmunk friend and all.
16.② ロバート：なぁ　あの・・・ジゼル　さっきの話おもしろかったよ。友達のリスの話。
16.③ ロバート：ジゼル　リスとオオカミの話は面白かったよ

上記の場面では、字幕に「リス」だけではなく、英語にない「オオカミ」がある。その「面白かった」話には、リス・オオカミ・赤ずきん・おばあさんが出てくるので、誰の話と言えば理解が速いか考えた結果だといえる。(映像にはリスやオオカミは出てこない。)

ここまで、英語のセリフには無かったものが字幕に表示されていたり、代名詞が具体的に訳されたりしている場面を見てきたが、そのように訳されている理由は3つ考えられる。

1．受容者が字幕を目で追っていて、映像を見られない瞬間があるので、その分情報を補っている、あるいはその伝達を確実にしている。(理解の補助・補強)
2．字幕で「これ」などの代名詞を用いるのはあまり好まれない。(そもそも代名詞は前に出てきたものの言い換えなので、字数制約で最後まで残る可能性は低い。)
3．全体の文字数を減らそうとして、最も端的でわかりやすい言い方にした結果である。

以上のように、映像と字幕のタイミングや、観る人の理解の仕方などが考慮されていることがわかる。ただし、字数が増える単語を採用したり、英語のセリフに無かった語を字幕に入れたりしたとしても、それ以外の箇所を減らしているので、全体としての文字数は減っているといえる。

3.2 質的観点 ～同音異義語～

1では、英語のセリフから日本語の字幕への量的変化を見てきたが、次に質的な観点で字幕を見ていく。ここでは、映画字幕が常に抱えている字数制約に、一般に翻訳が抱えているような日本語と英語の違いという更なる制約が加わったらどうなるかを見ていく。そのような言語的特性の違いがある場合、ただ意味を正しく伝えるだけでは、会話が成り立たないこともある。

そのような言語の違いの例として、今回の映画で特徴的だった「同音異義語」を取り上げる。翻訳された時点で、英語の持っていた「音」ではなくなるため、作品中でその音だからこそ成り立っていた会話を、日本語でどのように再現するかは工夫が必要である。ここに、その翻訳の質を見ることができるはずである。以下、比較的翻訳がしやすいと思われるものから、翻訳困難なものの順に、例を3つ見ていく。

3.2.1 call

1つ目は、'call' が「電話する」と「呼ぶ」という意味を持っているためになされた会話である。まず場面を見てみよう。

17.① Robert: You need me to <u>call</u> somebody for you?
18.① Giselle: Well, I don't think they'd hear you from here.
19.① Robert : What?

Robertは、「電話を用いて誰かを呼ぶ」という意味で 'call' を使う。しかし、Giselleはおとぎ話の世界から来たため、電話という物を知らない。よって、'call' をただ「声を出して呼ぶ」だと思っている。RobertはそんなGiselleの返答が理解できずにいる。

次に吹き替えを見てみよう。

17.② ロバート：誰か電話で呼ぼうか？
18.② ジゼル：ここからじゃ呼んでも聞こえないと思うわ。
19.② ロバート：(驚いた表情)

ロバートのセリフには「電話」も「呼ぶ」も入っており、ジゼルは「呼ぶ」だけに反応しているように見える。知らない物である「電話」が耳に入っていないのか、あるいはそれが「ここから」でも人を呼べる物だと知らないからなどが考えられる。この場合、日本語でも「電話」、「呼ぶ」という2つの意味が近いために可能な訳し方とい

える。もし、ロバートが「電話」しか言わなければ、ジゼルが理解できないはずだと考えられる。

では、字幕を見てみよう。

17.③ ロバート：電話(コール)する？
18.③ ジゼル：呼ん(コール)でも聞こえないわ
19.③ ロバート：(驚いた表情)

面白いことに、字幕に「コール」というルビが付いている。ルビが無ければ、本来つながっていない会話である。字数制約で吹き替えのような手段は使えないので、両者それぞれの主張を訳すことが第一である。しかし、それではやりとりにならないので、映画を観ている人の耳に聞こえている‘call’という音を、2つのセリフにルビとしてつけるという工夫がなされたのではないか。

3.2.2 kick

2つ目の例は、大人の Nancy と、6歳の Morgan の会話である。

20.① Nancy: What do you say, you ready to kick it?
21.① Morgan: Kick what?

大人の Nancy は、もう出かけられるかと聞くために‘kick’と使う。しかし、6歳の Morgan はその意味を理解できていない。

次に吹き替えを見てみよう。

20.② ナンシー：大丈夫？もう行ける？
21.② モーガン：蹴るって何を？

‘kick’を「行ける」とすることで、偶然にも「ける」という音が生まれ、モーガンが受け取った「蹴る」という意味と音声上つながる。厳密に見ると、英語のような同音異義語ではなく、相手の発言の一部だけに反応したことになっている。(‘call’の吹き替えと少し似ている。)

では、字幕を見てみよう。

20.③ ナンシー：出かける？
21.③ モーガン：足でけるの？

今度は、「出かける」となっているが、同様に「ける」という音が生まれている。し

かし、「蹴るって何を？」だと長いせいか、「足で」を補って専ら「蹴る」に焦点を絞ることにしたように見える。吹き替えと同様、発言の一部に反応したやりとりになっている。'Kick what?' という反応と比べると、結果的に日本語はあまり普通ではない会話なので、再現が難しい場面だといえる。

3.2.3 eye と I

最後の例は、同じ音でもスペルが違う 'eye' と 'I' にまつわる会話である。

まず場面の説明をしよう。Giselle は部屋の窓際に座り、部屋の中の方を見ている。すると窓の外に巨人の Troll が現れて部屋を覗き込むので、窓の外にはその片目だけ見える。よって、部屋にいた動物たちが、窓の外から覗き込む Troll に気づいていない Giselle に警告する場面である。

22.① animals: Eye! Eye! Eye! Eye!
23.① Giselle: I... I what?
24.① Troll: I eat you now.

この場面のおもしろさは、何度も出てくる/aɪ/の音である。登場人物たちの思惑は別として、映画を観ている人には感じる一貫した流れである。Giselle は、普通まさか窓の外に目が見えるとは思わないので、/aɪ/と言われて 'I' だと思っている。しかし、このことは分析中に英語字幕を見るまで気が付かなかったため、場面にはほぼ影響がないことだと思われる。

次に吹き替えを見てみよう。

22.② 動物たち：目　目　目　目
23.② ジゼル：え？　目ってなんのこと？
24.② トロール：おまえを食ってやる

吹き替えでは 'eye' だけになっている。動物たちのセリフは4回言われる「目」で、原文の音に忠実である。ジゼルのセリフについては、日本語だと「目」と「私」という別の音になってしまい会話がつながらないため、さらに前述通りジゼルが「私」だと思っても場面に影響がないため、「目」のみにしたいえる。トロールの 'I' は、文脈で明らかな主語のため、そして「目」とつなげることはできないため省略されてい

る。

では、字幕を見てみよう。

22.③ 動物たち：目が・・・ 目が・・・
23.③ ジゼル：何なの？
24.③ トロール：食べちゃうぞ

吹き替えと主旨は変わらないが、ジゼルは「目」とも言っていない。また、字幕では繰り返しが好まれないことが動物たちのセリフからわかる。よって、4回言われると「目」の印象が強いが、それがここでは弱まっているため「何なの？」だけで十分自然だと見受けられる。このように、原文にあった/aɪ/の音の連続は、吹き替えと字幕で無くなっていて、今回の場合ほぼ再現不可能だと言ってもよい。ただ、字幕では英語の音は聞こえているので、全員/aɪ/と言っているおもしろさを感じる人もいるかもしれない。

以上の質的観点の分析から、字幕翻訳は、字数制約を考慮し原文から取捨選択するだけではなく、一般的な翻訳と同様、原文のおもしろさなどを伝える質的な工夫も必要だということがわかる。ここに、ただ正しく意味を伝えるだけではない、翻訳者の創作が見受けられる。

4 結語～映画 *Enchanted*（『魔法にかけられて』）から見えてくる字幕翻訳の特徴～

以上本稿では、映画 *Enchanted*（『魔法にかけられて』）における日本語字幕の特徴を、量的観点と質的観点から分析した。最後に、今回の映画から明らかになった字幕翻訳の特徴を確認する。まず量的観点からの分析についてである。字幕は、時間と文字数の制約があるので、英語のセリフを全て訳したときの日本語よりも文字数が減っていることが多い。その際、日本語の特性として、表意文字である漢字の伝達性、文脈を読んで言わなくてもわかることは省略すること、助詞があることで少ない語でも文が成り立つことなどが、字幕の文字数を減らす手法になっていることを本稿で指摘した。さらに、日本語は否定語が後ろにくるので、字幕の文字を読む途中で、解釈をし直すことを避けるために言い換えが必要な表現があることも確認した。次に、英語のセリフのスピードが速いときは、ストーリーが重視され、会話の主旨から少し逸れるものは大幅な省略をされることがわかった。そして、字幕において、映画を観る人

が能動的に文字を読みながら進むということについては、映像と字幕のタイミングも考え、ストーリーの意味を伝えるだけでなく、理解の補助と補強という役割を字幕が担っていることが明らかになった。最後は、質的観点からの分析についてである。本稿では今回の映画に特徴的だった言語的特性の違いのうちの「同音異義語」について分析した。これは翻訳の質が問われ、ただ意味を訳すだけでは場面のおもしろさが伝わらないので、翻訳者の創作という質的な工夫がなされることがわかった。

今回は、映画 *Enchanted*（『魔法にかけられて』）の字幕翻訳におけるいくつかの特徴が明らかになったが、字幕の制約に焦点を当てたので、より翻訳とは何かを明らかにするための今後の課題として、言語構造などの言語的特性の違いがどのように翻訳に影響しているか分析していきたいと考えている。

註

1) 戸田奈津子(2009)『字幕の花園』集英社,4-6.

2) この映画の DVD では、設定を変えることで英語字幕を表示させることができる。英語字幕は、役者の一部のアドリブを除いて、英語のセリフとほぼ同じ内容である。

本研究で使用した資料

Enchanted, Walt Disney Pictures, 2008. 字幕翻訳：古田由紀子

発売元：ウォルト ディズニー スタジオ ホーム エンターテイメント

監督：Kevin Lima

参考文献

Jeremy Munday (2008) *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*. Routledge.

Mona Baker (2009) *In Other Words*. New York: Routledge.

青山南 (1996)『英語になったニッポン小説』, 集英社.

安西徹雄 (1998)『翻訳英文法徹底マスター』, バベル・プレス.

安藤貞雄 (1986)『英語の論理・日本語の論理: 対照言語学的研究』,大修館書店.

松浪有 他 (1994)『大修館英語学事典』, 大修館書店.

小池生夫(2003)『言語学事典』，研究社.

外山滋比古(2003)『英語の発想・日本語の発想』，日本放送出版協会.

戸田奈津子(2009)『字幕の花園』，集英社.

鳥飼玖美子 監訳(2009)『翻訳学入門　ジェレミー・マンデイ』，みすず書房.

西光義弘(2002)『日英語対照による英語学概論』，くろしお出版.

別宮貞徳(1983)『英文の翻訳』，大修館書店.

前田尚作(2006)『日本文学英訳分析セミナー: なぜこのように訳したのか』，昭和堂.

(岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育コース)